

会員の広場



## 東日本大震災の真っ只中で

桜の聖母短期大学学長代行

柴田 香代子

3月11日午後2時46分という文字を目にすると、思わず心臓の音が高まる、いつになったらこの文字は意味ある思い出になるのであろうか。マグニチュード9という想定外の大地震・大津波・原子力発電所の事故・風評被害・それに続く事後処理の遅延の発生。福島市にある桜の聖母短期大学は、卒業式を翌日に控えてのリハーサルが終わったところだった。大地を揺るがす咆哮と共に、経験したことのない激烈な揺れが襲ってきた。立ってられない激震が待てども待てども止まらない。粉雪が舞う寒さの中、全学生をキャンパス広場に、学生たちは折から避難してきた学童保育の小学生たちを、卒業式リハーサルのために身にまとっていたガウンの袖を広げて、親鳥のように囲んで「大丈夫よ、大丈夫よ」と暖かく包みこんでいた。その光景は嬉しかった。その晩は殆どの学生がバス・電車不通で家に帰れず、学生ホールで一夜をあかした。余震はその後、絶え間なく1ヶ月は続き、終わりが無いような不安であった。

あれから3カ月たった今日、東北はどうであろうか、沢山の善意溢れるボランティアの方々を迎え、想像を絶する災害の爪痕は、まだ8,000人を超える行方不明者があると新聞は報じている。人々の生活に便利性をもたらしていた福島第一原子力発電所の損傷は著しく、安全神話は完全に崩れ去り、不安や憤りはますます増大である。

福島県は「フクシマ」で世界中に名を轟かせてしまった。原発の収束はいまだ見えない。私たちの短大は福島第一原発から60kmのところであり、目に見えない放射能と日々格闘中である。先日、車で原発から20kmまで近づいてみた。津波の大災害の跡は悲惨だ、現実を見ないと実感できないが、後ろを振り向けば、それと対照的に山々の緑は深まり、木々は新緑に輝き、花々は咲き乱れている。しかし、誰も見ていない、人っ子一人いない、完全に閉ざされた沈黙の家々が不気味に建っている、放射線による避難区域。本来なら、あるはずの田植えを終わった美しい水田もなく、荒れ果てた田畑。不本意に避難所に追いやられた人々の悲しい思いが胸にキュンときた。

不安な中、1ヶ月遅れで5月連休明けに入学式を行った。学生1名は津波に家族共々呑み込まれ、黒枠写真の入学式となった。17名の学生たちは地震・津波で家を失い、全壊・半壊、または家はあ

るけれど、避難区域のため家に帰れない。外国人教師は国外退避を言われた。

先日、「アカデミア・コンソーシアムふくしま」の学長レベルのテレビ会議が行われた折、いずれの大学・短大も手痛い災害を受け、更に来年度に限らず、当分の間続く放射線問題・風評被害による打撃は更に大きく続くであろうことを実感した。

これらのマイナスは大学経営上避けられないことと残念ながら覚悟はしている。それでも、原発被害で空洞化した町に、小さな声で響いている「がんばっぺ 福島」の叫びに私は共感している。私たちの短大は総勢 400 名足らず、しかし、学生の生きる姿勢は大きく変化した。この災害の中で、家を失い、友を失い、町を失っている学生たちを教職員全員で助け合っている。無縁社会を憂っていた矢先のこの大災害。家を失った学生たちの必需品は全部教職員でそろえる事ができた。心のケアは専門のカウンセラーが大入満員で音をあげている。教員は全員、顧問制度でそれぞれ 20 名弱の学生によりそって、物心両面に心を配っている。学生たちは明るい学生生活を取り戻した。顔しか知らない学生でも、近づいてきて握手して「先生がんばろうね」と可愛くささやく。無縁社会の風潮は吹き飛んだ。この大災害で学生たちひとり一人は、自分の苦難、友達の苦難にふれながら人間として一番大切なこと、人間はひとりで自分のために生きるのではない、人のために生きるのであることを学んでいると実感している。苦難はつらいけれど、やっぱり、人生の師であると私は信じている。「がんばりましょう」の言葉は学生と教師の合言葉になってしまった。意味は以前と大きく異なる。以前は自分のためにがんばっていた。今は自分のためより、人々のためにがんばりますに変わったように思う。人のためにがんばる時、喜びと力が湧く。この体験が、この大災害をとおして神から、天からいただいた貴重なプレゼントであろうか。

私たち短大は何年も前から「小さくとも教育では日本一に輝いていたい」をモットーに歩んできた。このモットーは今でも肯首している。故郷・福島の復興のために貢献できる人材を福島の地で育て続けたいと願っている。

先に少しふれたアカデミア・コンソーシアムふくしまは「復興ビジョンにおける高等教育の重視に関する要望書」を全会員一致で福島県知事に提出した。

巨大地震に続く巨大津波、さらに原子力発電所の大災害と、立て続けに襲った災害により、福島県はかつて経験したことのない苦難の中にあります。とりわけ原発災害は、たとえ事故現場が収束したとしても、その後も長期にわたり深刻な被害をもたらすことは間違いありません。復興・再生の道のりは長いと覚悟しなければなりません。……中略……大災害からの復興や再生には「お金」も必要ですが、なによりも「人」が大事です。若い担い手が育っていかねば、復興の道は決して開けません。今度の災害がもたらした「教育の危機」にどう対処するか、それは本県の復興ビジョンを作りあげていく際の不可欠のテーマでなければならないと考えます。福島県の高等教育に携わる私どもは、この未曾有の困難に際し、それぞれの持てる資源をフル動員して「復興」に貢献する決意を互いに確認しました。研究機関としてさまざまな分野で復興の事業に参画するとともに、教育機関としての使命をかけた事業に取り組みたいと考え

ています。

提出された要望書の内容の中にある文の引用である。

不可能に立ち向かう時こそ、思いがけなく、力をいただく私たちかもしれない。

最後に、付け加えさせていただきたいことは、桜の聖母短期大学は東日本大震災で保護者を失った青少年の教育のために東日本大震災ともしび会「桜の聖母里親制度」をたちあげた。この混迷の中、日本・福島を復興させる真のエネルギーは未来の人間を育てることにあると確信している。この大災害で保護者を失った青少年の数は 1, 000 名を超えるといわれている。青少年が教育を受けられる場、家庭のような暖かい生活の場を、私どもも大変厳しい財政状況のなかにあるけれど、万難を排して整え、提供したいと考えている。

どうぞ、東日本が、この未曾有の出来事に負けないで、新しく力強く新生してゆけますよう、賢明な知恵と応援をお願いいたします。

---

#### 柴田 香代子 (しばた・かよこ)

1931 年広島県福山市生まれ。岡山ノートルダム清心女子大学英文科卒。1965 年コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会入会、上智大学大学院神学研究科修士課程修了。桜の聖母短期大学学長・生涯学習センター長、コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会日本管区管区長、現在、桜の聖母短期大学学長代行。全日本大学開放推進機構法人会員。